

TUFS歴史・地域研究セミナー

第3回 Workshop for History and Area Studies



報告 岩瀬 みゆき (本学博士課程)

聖なる植民地 —作家野上弥生子と北軽井沢大学村

コメント 逆井聡人 (本学教員)

日時 11月14日(水) 17:40～

(1時間程度を予定)

場所 海外事情研究所会議室(研究講義棟 427)

申込不要 学部生歓迎 主催 海外事情研究所

アジア・太平洋戦争の敗戦とともに日本の植民地統治は終焉したが、敗戦国となり、自動的に植民地が失われたことは、旧植民者としての自覚や責任感を弱め、日本人の帝国意識が継続する要因となった。本発表では、作家野上弥生子(1885-1985)の戦後初期の作品を分析することで、このような意識と文学作品の関係性を提示することにしたい。先ず1940年代の作家活動を辿りつつ、野上の仕事がどのように進展していったかを検証する。次いで戦時期から戦後までの随筆、評論を取り上げながら、西洋近代の秩序原理に基づく発想と植民地主義の連続性を確認する。2節では1941年から1947年にかけて発表された、北軽井沢を舞台とする一連の小説「北軽もの」を概観する。このなかで1947年に発表された3作品について、第3節、第4節で作品分析を行う。特権階級、民主主義、国民化、他者、植民地台湾、というさまざまな主題を扱いながら、近代主義と植民地主義が内在化された野上の戦後初期の作品を読み解いていく。